

< 河上肇記念会 >

河上肇記念会との出会い

1987年4月の京都市議会議員選挙で当選が決まった日の翌日、私は鹿ヶ谷法然院にある河上肇の墓前に当選の報告をした。

京都大学に入学した当時は経済学部を中心に京大河上祭が行われていて、記録によると入学した1965年の6月4日には宮川実氏の記念講演が教育文化センターホールで行われている。挨拶は「蜷川虎三（京都府知事）、末川博（立命館総長）、谷口善太郎（衆議院議員）」となっている。

私は、候補者活動の中である集まりのときに、もし市議会議員になったら、約束をしたことがある。それは自宅の近くに法然院という寺院があり、そこには河上肇夫妻の墓碑と「たどりつき ふりかえりみれば山川をこえてはこえてきつるものかな」の石碑がたっている。この墓前の名刺入れには墓参の方の名刺が入れられていたが、いまではこの返事を出す係がいない。私は家が法然院の近く（銀閣寺交差点付近）でもあり、今後、河上肇夫妻の「墓守り」を引を受けようというのがその約束であった。当選後、毎年10月に開かれている河上肇記念会の総会にも参加して私の希望を表明し、やがて河上肇記念会の世話人の一人に加えていただいた。

人間・河上肇

私は大学は理学部宇宙物理学科、河上肇の学問は経済学（マルクス経済学）なので学問上のことは詳しいところまで理解できないが、河上肇という人物を知れば知るほど引き込まれてしまう。

大正デモクラシーから治安維持法による弾圧、やがて暗黒のアジア侵略戦争に突き進むという時代が時代だったから河上肇の生き方も世の常識を超えたものであった。内村鑑三、木下尚江、田中正造などの影響もあって、血気盛んな河上肇は、足尾銅山鉍毒事件救済の講演を聞いて感動し、もっていた衣類のすべてをカンパして関係者をおどろかせ、新聞にも「特志の大学生」と報道された。

また、大学卒業の1905年、新聞連載の「社会主義評論」の執筆を打ちきり、大学での教職も辞職、妻子を郷里に帰して、一種の新興宗教運動「無我愛」の運動にとびこむが、この運動の実態を知って2カ月で無我苑をとびだしてしまう。

1916年発表の「貧乏物語」はベストセラーとなったが弟子の櫛田民蔵に批判され、絶版にしてしまう。

1920年代、米騒動や労働運動、日本共産党の創立、

やがて世界恐慌から戦時体制へ 河上肇のマルクス主義に対する確信は一層強くなっていき、ついには実践活動に参加していく。彼は「顧みれば、私のマルクス説への完全なる推移は、軽蔑に値するほどの多年に亘る躊躇と折衷的態度との後に、遂に実現されたものである。だが思索研究の久しきを経て漸く玄に到達しえたる代りには、私は今たとい火にあぶられるとも、その学的所信を曲げがたく感じている」と書いている。

1932年9月9日、日本共産党は河上肇の入党を承認する。法然院墓地の歌碑に刻まれているのは、日本共産党に入党した感慨を詠んだ歌である。

河上肇は1933年1月、ついに地下生活140日で東京・中野区のかくれ家で検挙され、治安維持法違反で起訴されて懲役5年の判決を受け下獄する。獄中でも権力側は、河上肇を転向させようと誘惑する。刑期の三分の一をすぎると、河上肇は「仮釈放」に期待して迷うが、この時期の河上肇と面会にきた妻・秀との会話が自叙伝にある。

「まるまるお勤めになっても、あともう三年足らずの御辛抱です。お辛いことは重々お察し致しますが、無理をしてお出になると、折角早く出ていらしても、あとできっと後悔なさるに決っています。無事に勤め上げてお出になりましたのなら、今度こそ、そりゃもう一生の重荷を卸したというお気持ちで、気楽に余生を楽しんでいただきたい。私はそればかり祈ってるんです」これをきいて河上肇の腹はきまり、獄中生活を貫き、1937年6月15日、刑期を満了して出獄した。

私は自分の青春時代からの遍歴を振り返って見たとき、マルクス主義の哲学・経済学、日本共産党綱領など学ぶべき確立された理論は整っていたが、日本共産党の専従・やがて市議会議員としてそれらを読み通すだけで

「間違っていない」と確信を持って言えるのだろうか。論争をかいくぐって時には悪戦苦闘して成立してきた理論の上澄みだけを口移しのように繰り返しているだけで多くの人々を説得できるのであろうか。

私が河上肇の生涯に学ぶのはこうした彼の苦難に満ちた前人未踏の努力の足跡である。

河上肇の魅力は尽きない。

